武田さんを偲んで

加曽利貝塚友の会
会長 土屋秀雄

昨年の3月3日、一人の考古学者が88歳の長寿を全うされひっそりと黄泉の旅に出立された。それから早くも一年がたった。その日の前日の朝、千葉県北西部は、雨が雪に変わり、春とは名のみで寒波再来。さすがの友の会副会長の武田宗久さんも高齢に打ち勝てずに、こよなく愛した加曽利貝塚のさくら花も見ること無しに逝去した。

思えば今から四十数年前、日本列島は、神武景気とやらでバブルの第一波が襲っていた。そのため貴重な貝塚や古墳などが開発の波に呑み込まれ消えていった。そんな中、ひとりの高校教員が敢然として立ち上がった。

「加曽利貝塚を守ろう」と。とくに昭和38年3月になると地元千葉日報の紙面には、しばしば、武田さんの加曽利貝塚研究と保存の関係記事がめだった。彼の物静かな語りの中に凛とした、りりしさを感じさせ、地元紙ばかりでなく東京各紙もキャンペーンに出た。当時、県庁内の記者クラブには、朝、毎、読、NHK、日経、産経、東京、共同、時事、千葉と十社が加盟していた。

戦後、食糧事情も次第に回復すると、マスコミに考古学関係の記事が目立つようになってきた。友の会の会員では、渡辺太助（読売）石井暉二（千葉のち東タイ）山内章二（NHK）と内山種二（毎日＝故人）ら各氏と土屋秀雄（千葉）ら遊軍記者がいた。武田さんは、記者たちの間で殿様というニックネームで呼ばれていた。これは県社会教育課の考古学係長でワセダの先輩に当たる平野元三郎さん（故人）が命名したのに由来する。つまり、武田さんは、甲斐の国の武田氏の末裔で庁南（現長生郡長南町）に逃れてきた武田豊信の子孫であるからだ。

もちろん、そんな家系を武田さんは、一度も口外したこともない。売名を極度に嫌い、事実に忠実な学者の良心が取材者にとっては、頼もしい限りであった。それだけに記者たちも、彼の悲願「加曽利貝塚の保存」の応援団を何時の間にか形成していた。近年、日本の考古学を揺るがす不祥事が発生したが、名もなく清く美しく、ひたすら考古学の真理の探求に生涯を送った武田さんに、限りない追慕の情を禁じ得ない毎日である。